

特集：文化の越境と翻訳

「翻訳」の研究対象や方法が広がりを見せている。従来、翻訳研究というと、言語間、あるいは文学作品の翻訳の問題が中心となっていたのに対し、近年では文化全体を視野に入れてとらえるようになった。私たちの日本近現代文化研究センターにおいても、2011年に、「翻訳」・「文化の越境」をテーマとして、2回の国際ワークショップとシンポジウムを開催してきた。「超域的日本文化研究」を副題とするこの『JunCture』にとっても、大変魅力のあるふさわしいテーマであることは間違いない。

ただ、実際に、「翻訳」そして「文化の越境」を研究のテーマとすると、その無限の可能性に心躍る一方で、まさにその研究対象と方法の広がりのために戸惑いを感じてしまうのもまた事実である。杉田玄白は『蘭学事始』の中で、『解体新書』翻訳への第一歩を「誠に艱難なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、たゞあきれにあきれて居たるまでなり」と表現しているが、翻訳についての研究に立ち向かう現代の我々も、まったく同じ思いを抱くのである。

今回、この特集に寄せられた8編の論考は、それぞれ論者の専門性を基点とし、奥深さと重さを感じさせられるものであるが、それだけでなく、個性あふれる各編が持つ可能性と、全体として放つ広がり、まさに、今後の翻訳研究にとっての指針となり得るものと確信する。